

カード法による国語教材研究の実態

野 宗 睦 夫

I どういう動機でカード法によって

教材研究をするようになったか

一九四八年（昭和23年）、わたしが広島高等師範学校の三年の時の十二月二日の日記に次のように記してある。

野地教官と話を色々してみても初めて学問の方法といふものの糸口が分かった様に思ふ。卒論の方は昭和文学史に決めた。結果はどうでもよい。これを以って高師四年間に得た学問の情熱といふものになれば幸である。卒論を通して後の学問への情熱の礎石とすることが出来ればよいのである。野地教官はカード方式の方法を説かれたが確に好い方法である。早速カード式を実行しようと思ふ。資料もできるだけ集めねばならない。今日は一日中何か嬉しくて落着かなかつた。

当時の高等師範は広島市出汐町の旧被服廠を改造した校舎であった。その校舎の一室で、友人のM君といっしょに野地先生に卒業論文を中心として研究の進め方についてあれこれお聞きした時の日記である。「野地先生」とせずに「野地教官」としたり、「学問の情

熱」と言ったりして、十九歳の若者の気負いのようなのがみられる。また歴史的かなづかいと現代かなづかいが混用されたりして、敗戦後の国語国字問題の変動期の影響も垣間見られる。しかし、ずいぶん感銘を受けたことは最後の一文「今日は一日中」云々を見て分かる。当時の気持ちを推察してみると、評論など読んでいて、引用などに出くわし、よくこれだけのことを知っているものだと素朴な疑問を持っていたのが、氷解した驚きがあつたのであろう。

カードをとることが心に刻みこまれて、卒業論文はカードによって研究を進めた。「昭和文学史」（途方もなく大きい題目であり、今でも恥ずかしい思いがしている）なる卒業論文を書く過程で、カードをかかりとった。指導教官の野地先生は、「カードによる研究生活の愉しさが、眼に見えるようで、快く、興味深く辿ることが出来た」と批評の冒頭に書いてくださった。

この卒業論文によってカード法の便利さをはじめて知った。研究者にとっては珍しいことでもないこの方法が、わたしにとっては目を開かれる思いがした。なお、この卒業論文に使つたカードは、作家別に集め、アイウエオ順にして袋に納めたものが今も残っている。一九五〇年（昭和25年）四月から広島県立尾道高等学校に勤めるようになり、教材研究と格闘する毎日であつた。教材研究は教科書

に書き込みをしたり、ノートをとったりする中で、作家論・作品論などの引用は、卒業論文の延長線上にある作家研究のためにも必要かもしれないと思い、時々カードにとって、授業に使って終わると、卒業論文の袋に入れていた。こうして、教師となつてはじめて担当した一年生を三年生まで持ち上がった、彼らが卒業した時、「一休わたしの中に何が残ったのか。」というわたしの教師としての生き方と結びついた疑問が生じた。その疑問が、国語教育研究への目撃めとなり、また、教材研究の方法の改善ともなった。

教科書の書き込みやノートに書く教材研究は、そのときは便利がよくても、あとで使えない、結局は無駄なくり返しをすることが多いのではないかと考へるようになった。教科書の書き込みは教科書が変わればそれきりである。ノートもちぎれば別として、教科書の場合と大差はない。古典の教材など扱ふ教材はあまり変わらないのに、教科書が変われば、もう一度前に調べた語句を調べ直すことが多いことが分かつたのである。

なにかもつと能率的で、教材研究を深める方向での教材研究はないものかと考へていた時、カードによる教材研究をするのはどうだろうかと思ひついた。ことにわたしの思考方法は、教材研究の過程を着実にたどつて行くのではなくて、断片的にひらめいたり、指導過程の後の方をまず思ひついたりすることも多いので、ノートに納まりきれなかつたこともある。

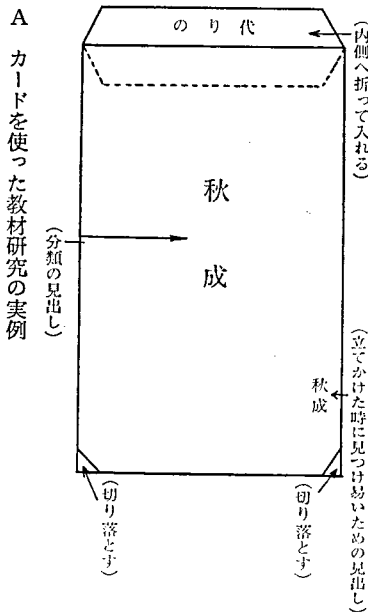
高校国語教師として目撃めた第一歩としてカードによる教材研究を始めたのが一九五三年（昭和28年）の四月、もう一度一年生を担当した年からである。なお、カードによる教材研究と相俟つて、実

践の記録をこの年からとり始めてもいる。この実践記録は三年間、すなわち持ち上がり二回目が終わるまで続いた。

II どういうカードがあり、どういふ分類がしてあるか

教材研究のカードは西洋紙四分の一大のものを使うことにした。これは、卒業論文のカードがそうであつたし、手に入れ易いということも考へたからである。また、当時紙がまだ豊かでない、紙質の好いものは印刷物の裏を使うことを考へたからである。現在は、上質紙を買つて、カッターで四つに切つて用いている。

カードを入れる袋は、最初の中は自分で作つていたが、後には文房具店で手ごろの封筒があつたのでこれを用いている。封をするのり代は折り込んで内側に入れ、下の二つの隅は斜に少し切り落として、カードを入れてふくらんでも中のカードが痛まないようにしている。



A. カードを使った教材研究の実例

わたしの教材研究は大体において、次のような要素から成り立っている。

- (1) 指導目標を立てる。
- (2) 指導過程を考える。
- (3) 学習の手引きを作る。
- (4) 本文の全体をつかむための作業を考える。
- (5) 本文を教室でどう指導するかを検討する。
- (6) まとめの作業を考える。

カードをとり始めた一九五三年ごろと違って現在は大体この(1)の流に從って教材研究は進められるようになっていて、

初めて扱った教材のカードの例として、一九七九年度の「現代国語一年」で最初に扱った羽仁進「青い時間」の例をあげてみる。

(人生)

羽仁 進 青い時間 筑摩 現代国語1二訂版

指導目標

- 1、指示語・接続語に注意しながら、論旨の展開をつかむ。
- 2、事実・具体例の部分と筆者の意見の部分を読み分ける。
- 3、筆者の考えたことが各自にあてはまるかどうか考える。

1979.4.8

この文章は「初恋のころ」「個性を作る実験」「本との出会い」の三つの章からできている。「初恋のころ」は前記の指導目標に続

いて次のカードを書いた。

(人生)

青い時間

初恋のころ 今撮影している……ちがいない。

(1) 筆者の意見・感想を述べた段落をつかむ。

3段落 2段落の事実の理由

10段落 ツルゲーネフの「初恋」の中にある問題点

(2) 映画と「初恋」とはどのような共通点があるか

初恋が現実的な問題を持っている

(3) 10段落「やはり」||映画と共通する意識を示す

(4) 10段落でこれから考えて行くことを提示した。

1979.4.11

は

授業の期日が切迫しているので、指導過程を抜きにして本文の指導内容のカードになっている。これが次の「個性の実験」となると、指導過程のカードは次のようになっていく。

(人生)

青い時間

個性を作る実験

指導過程

1、段落番号を打つ

2、1~20の段落を指名読

―筆者の個性に対する考え方がもっともよく表れていると思われる段落をいくつかあげる

6段落 何か

9 “ もっと大きいもの

は

11 " 何か

18 " ほんとうの個性とは

3、仮説を検証するために読みとる

4、筆者のいう個性とは何かをまとめる

1979.4.17

学習の手引は「初恋のころ」「個性を作る実験」ともなく、「本との出会い」になって作成している。

(人生)

本との出会い

青い時間

は

1 段落 「乱読」と反対の読書をどういうか。

2 筆者の「このころ」の読書と若い時の読書とはどういう点が違うか。

(略)

14 | 15 13段落の何の具体例か

1979.4.19

このカードはもちろん、プリントして生徒に配る下書きである。プリントの方は1段落が問一となり、また「13段落の何の具体例か」が「14・15段落は13段落のどういふこと具体例か」と分かり易くしている。

わたしにとって初めての教材であり、入学してすぐの一年生が初めて学習する教材でありながら、きわめて複雑な教材研究をしていることがカードのとり方にもみられる。年度初めの忙しさに、七八年度の組合の分会長の仕事が残っている中で行われた教材研究だといふことはあるにしても、なお、「本との出会い」を実際に教室で

扱ったのは、五月に入ってからである。

本文の全体をつかむための作業というのは、いわゆる第一次感想の場合もある。また難しい語句を調べることも、問題点を指摘することも、この作業の中に含まれている。「青い時間」の場合、なぜ青い時間という題がつけられたのか、を本文の全体をつかむ作業としてやらせようかと思つたが、あまり意味を持たないと考えてとりやめたので、カードにとるに至っていない。

まとめの作業については、次のようなメモをカードにとっている。

(人生)

青い時間

は

筆者の考えと各自の考えとを重ねる課題

1、初恋のころ A 筆者は初恋はどういう問題点を持っていると考えているか。簡潔にまとめた文章でまとめよ。

B

Aでまとめた初恋のとらえ方について、同意できる点、教えられた点、よくわからない点などあげよ。

2、個性を作る実験

18段落に述べているような筆者の考えに立つ時、君たちは自分の個性を作るのに、どういふ障害があり、その障害をどう乗り越えたいと考えるか。

3、本との出会い

この部分の文章に述べてある筆者の本との出会いで、とくに印象に残った一文をとりあげて感想を述べよ。

1979.4.26

(人生)

青い時間

は

筆者の考えと各自の考えを重ねる課題

書くことのねらい

1、初恋のころ

A 問題点の要約

A1まとまった文章

B 自分の立場を示す

B1まとまった文章

2 句読点をうつ

2、個性を作る実験

自分の問題とし

4 明確に状況をつ

3、本との出会い

文に対する感想

5 解決への手立て

6 理由・根拠が明

確につかま

確につかま

1979.4.26

以上

以上の二枚のカードをもととして、まとめの課題のプリントは作成された。そのプリントの一部を次に示す。

④

現代国語一年

「青い時間」

—まとめの問題—

初恋のころ

79・5・4 P1

A 筆者は初恋はどういう問題点を持っていると考えている

か。簡潔にまとまった文章で述べよ。

.....

.....

.....

.....

①問題点をつかんでいるか。 ②まとまった文章になっているか。 ③句読点をうっているか。(以下略)

右端の上の④はプリントの通し番号である。解答欄の左の①②③は評価項目であり、これに○をしたり、レをしたりする。これまで述べたことをカード記入という点から整理してみると、次のようになる。

① カードの右端上にその教材の分類を書く。分類については後で述べるが、「青い時間」の場合、青春論なので「人生」の項目で整理した。

② 右端の中ほどに教材名を書く。ただし、指導目標のカードの場合には分類の次の行に、教材名・作者・教科書・発行所を書くことにしている。また、分類が古典の教材のように作品別になっているものは巻名・段などになる。

③ 右端の下には作者の頭文字を書く。袋に入れて、何人かの作者がある時、探し出すのに便利だからである。場合によっては作者の頭文字でなくて、作品の頭文字のこともある。

④ 一枚一項目が原則であるが、本文の分析の場合、一つの段落が何枚かになるものもある。はじめはホッチキスでとめてまとまりにしていたが、案外針がかさばるので、最近はその段

落の中途でも区切っている。

⑤ 左端の下に日付けを書く。これは後でいろいろ有効である。

⑥ プリントなどもカードと同じ扱いで、普通の西洋紙の場合、

四つに折ってカードと同じ整理をしている。

二歳以上扱う教材研究においては、はじめのカードをまず見るのはいうまでもない。そして、指導目標・指導過程・プリントは、たとえ新しくカードを作り、プリントを作っても保存するが、それ以外のカードは、新しいカードを作れば前のカードは捨てることになっている。これは整理の手間、保存の量の多さからくる煩雑さを考えたからである。指導目標・指導過程・プリントがあれば、その学習のあらましはつかめるし、本文の分析は前のを吸収しながら深めているのであるから、前のカードはなくてもよいと考えた。本文の分析で残すのはよほどの場合である。たとえば「源氏物語」で谷崎潤一郎訳を中心として読んだ時のカードと、本文に忠実に口語訳をして行く時の指導のカードはすいぶん異なるので、これは両方残してある。カードができると、できたカードは授業の流れにしたがって順番に科目別の袋、たとえば「青い時間」のカードの場合、「現工」と書いた、普通のカードの袋より丈夫に作った袋に入れられる。古い指導目標などのカードは、もとの袋に返される。教室へは科目別の袋を持って行って授業をする。

授業に使ったあとのカードはもとの袋へ返すことができるものはすぐ袋へ返し、家に持ち帰って、本棚の所定の位置に置くことにしている。しかし、新しい教材で手元に袋がない場合は家に持ち帰り、未整理のカードを入れる箱に入れて、夏休み・冬休み・春休みなど

に整理している。この整理の時、新しい袋を作ったり、袋の中のカードの順序を考えたり、時には分類をし直したりしている。

B 現在どういう分類がしてあるか

カードによる教材研究を始めたものの、どう広がっていくのか見当もつかないことであつたので、戸迷いやつまずきも多かった。まず困つたのは、どういう分類をするかであつた。カードの左端の上に何を書くかであつた。カードをとり始めた時、どんな分類をしたかは今日では明確につかめなくなっているが、現在あるカードを入れる袋の項目から推定してみると、ジャンル別で出発したようである。すなわち、小説・詩・随筆などの分類である。一方古典は、徒然草・枕草子などのように作品別であつた。古典の作品別は今も変わっていない。

現在の分類をあげてみる。これからあげる分類は本棚の一段を使つてすぐ取り出せるようにしている袋の項目だけであり、袋を分類の項目の頭文字にしたがってアイウエオ順に並べているものである。ただし漢文はこれらの後に別にして同じくアイウエオ順に並べている。

A行 11袋

秋成 芥川龍之介 芥川龍之介資料 安部公房 伊勢物語 A 伊勢物語 B 井伏鱒二 宇治拾遺 演劇論 大岡昇平 A 大岡昇平 B (以下こういういたものは〇〇A・Bの如くあげる) 大鏡

「芥川龍之介資料」の袋はプリント類だけ入れている。「伊勢物語A」は23段まで、Bはそれ以下。「大岡昇平A」は「浮城記」、Bは「野火」が入っている。

外国作家論 外国文学A~D 科学A~C かげろふ日記 川端康成 戯曲 戯曲資料 聞く 紀行A・B 北杜夫 記録 近世文学、近代詩全、近代詩個人A~C 近代短歌 近代短歌作家別A・B 近代俳句全 近代俳句個人 近代文学史 源氏物語A~G 言語 研究 研究テーマ 口語文法 古今集全 古今集作品 国語教育A~D 国語問題学指A・B 学習指導の略 国語問題学指資料 国語の実態A・B 国語学史 国語の将来 古事記A・B 個体史 古代文学 古典教育 古典語A・B 古典読解、古典入門 古典論 語録 今昔物語

「近代詩全」は個人に限定できない近代詩教材の指導目標や指導過程、作業のプリントなど。「研究」は今まで発表した実践報告・実践研究の題目・日時・枚数(時間)・場所(書名)などのカードが入っている。「研究テーマ」は思いついた時にテーマを書きとめている。現在(80年1月)三十四枚あり、一番古いものは六六年六月四日のものがある。「個体史」は野地先生の著書から名前を拝借したもので、わたしが就職してからの年度ごとの担当教科目・学年・時間数などが記入してあるカードを入れている。

サ行 41袋

西鶴作家論 西鶴A・B 作文の学習指導一年 作文の学習指導一年資料、作文の学習指導二年 作文の学習指導二年資料 作文の学習指導二年(グループ作文) 作文の学習指導二年(愛と友情) 作文の学習指導三年資料 作文教育 作文の評価 作文の形態別指導 更級日記A・B 更級日記資料 詞華集 思想 島崎藤村小説学習

指導 島崎藤村小説学習指導資料 島崎藤村小説 社会A~C 小説論 自主研究 新古今全 新古今作品 人生A~C 人生における出会い 人生論 随筆A~E 西洋美術 説話 戦争 川柳。

「詞華集」は古典の中で心をひかれた文章を抜き出してある。「社会」のAは公害・民主主義、Bは組織・マスコミ、Cは日本の社会・外国の社会、となっている。「自主研究」は七四年の二年の現代国語の単元である。「随筆」は作者別にアイウエオ順に並べてある。Aには遠藤周作「ヴェロニカ」、加藤秀俊「遠野への道」の二つのカードが入っている。

夕行 33袋

大学入試 太平記 竹取物語 竹取物語資料 大宰治 短編小説A~F 近松 長編小説 中世文学 堤中納言 徒然草全 徒然草各段A~F 徒然草助動詞 徒然草助詞 手紙 哲学A~C 伝記 読書 読書指導 土佐日記 土佐日記文法・資料

「大学入試」の袋は一時期大学入試問題の国語を分析していたので、これを入れている。「短編小説」は作家別にアイウエオ順に入れてある。Aには梶井基次郎「城のある町にて」が入っている。「哲学」は哲学的な思考の論説文を集めていて、Aには市井三郎「歴史の進歩とはなにか」、澤瀉久敬「理性の窓をあげよう」が入っている。

ナ行 10袋

夏目漱石作品 夏目漱石小説学指 永井荷風 日記A・B、日本入論 日本文化A~C 日本美術

八行 21袋

芭蕉紀行 芭蕉俳諧 A・B 芭蕉俳論 話すことの学指一年 話すことの学指二年 文化 蕪村 文学論 文語文法 文語助動詞 文語助詞 文語まぎれやすい語 文章論 文章論学指 平家 A・B 平家資料 方丈記 方丈記文法・資料 翻訳詩

マ行 13袋

枕草子全 枕草子 A・D 枕草子文法 枕草子資料 増鏡 万葉全 万葉作品 A・B 本居宣長 森鷗外

ヤ行 3袋

大和物語 大和物語資料 謡曲

ラ行 4袋

歴史 論説文学学習指導 論説文学学習指導資料 論説文指導体系 「歴史」は歴史論ともいうべきものである。「論説文学学習指導」は論説文を二つ以上にまたがる作業とか指導目標など、さらに実践報告などに使ったカードが入っている。

漢文 27袋

漢詩の学習指導 漢文入門 漢文と日本文学 故事 古文真宝 三国志 史記 史記資料 十八史略 A・B 諸子 中国古詩 中国説話 中国文学 唐詩全 唐詩個人 A・B 唐詩資料 唐宋の文章 A・B 杜甫 日本漢文 孟子 李白 論語全 論語 A・B

「中国文学」には魯迅「孔乙己」が入っているので、漢文でなく、前述の分類に入れてもよい。以上の袋の総計は二二六袋である。

これらの袋に何枚ぐらいカードが入っているかを、全部について

は数えられない。ために八十年一月末現在、教材研究に使うため学校へ置いているカードの袋にあたってみると、次のようになる。

古典Ⅱ（三年文科型4単位）

源氏C（夕顔）108枚、源氏F（玉鬘・笠）42枚、十八史略A

27枚、十八史略B 92枚、史記 102枚

古典Ⅰ乙（三年理科型2単位）

西鶴A 38枚

現代国語一年

外国作家論 32枚（「ジョナサン・スイフトの笑い」のカード

15枚は教室へ持って行く袋にある）、国語問題学指 54枚（「美しいことばとは」のカード 12枚は教室用の袋に）西洋美術 47枚

（「失われた両腕」13枚は教室用の袋に）伝記 54枚

古典Ⅱと古典Ⅰ乙は三年がすでに学年末考査がはじまっているために、教室へ持って行く袋から返されているが、一年の現代国語の

関係の袋は教室用の袋に40枚入っているので、それを加えなければ

ならない。以上十袋の総枚数は六四九枚であり、袋の厚さからみて

60枚が平均的だといえよう。これに資料のプリントなどが加わるが、

カードだけでいえば、現在教材研究に直接関係するものが一四〇〇

〇枚ぐらいはあるといえよう。

この直接教材研究に関係する袋以外に、同和教育関係・ホーム

ルーム関係が12袋、卒業論文とその後の読書による作品論・作家論

のカード、などが45袋、さらに現在使っていないので本棚の別の

ところへ積んでいるものが20袋ばかりある。この中には「漢字のあ

やまり」「表現のあやまり」「表現のおかしいもの」など、六〇年

前後に何年間にかわたって、生徒作文や広告などから集めたもの、「段落のはたらきの型」など研究が中途のままになっているもの、「映画」「放送劇」「落窪物語」など、かつては教材となつたが、現在は教材とならないもの、とある。

長い間にいつの間にかできあがつたカードの分類なので、外から見るとおかしな系統立っていない分類だといえるかもしれない。事実、わたし自身、ある教材、もしくはあるカードを探す時、二つ三つの袋にあたつて探すこともある。たとえば、随筆と論説の区別もあいまいであり、「随筆」に入れているか、「社会」や「哲学」に入れているか忘れている場合もある。どう分類するかは勘によることもあるといつてよく、それだけに後から探す時あちらこちらすることも起こる。論説といつても「言語」「国語問題」「日本人論」の違い、「社会」「人生」「哲学」の違いも明確にしない。

こういう雑然とした分類ではあるが、一枚一枚わたしが書いたものであり、わたしが分類整理したのだから、案外よく覚えていたのも事実である。書くことによって記憶した力が、雑然とした分類ではあつても役に立つことの支えになっているのであろう。

袋の項目を図書館のカードのように作者別にしてもよいのではないかという考えもあるが、こうするとおそらくまた別の問題がでてくるかと思う。すなわち、教材研究のためのカードの分類項目だから、全く同じ教材でなくても、ジャンルの同じような教材を扱う時は、ジャンル別にしてあつた方が過去の実践をより生かせる。整然としている方が教材研究に都合がよいとは限らないと思うのである。

Ⅲ カード法による教材研究から生まれたもの

A 実践報告・実践研究とのつながり

実践報告や実践研究などの場合、実践の実態をとりあげるのも、どうしても教材研究のカードをとり出さざるを得ない。さらに、一つの教材でなく、一年間ないしは三年間の考察とか、何年か隔つた実践の考察の場合には、カードは威力を発揮する。

実践報告、実践研究の基礎資料として、わたしは、このカードと、五三年(昭和28年)から毎年つけている学習指導日誌と、資料綴(その年度の科目ごとのプリント類の綴)の三つを揃えることにしている。

報告や研究の場合、進め方もカードによっている。すなわち一つのテーマが決まると、思いつくままに題目、構想、部分をカードにメモする。いくつかのカードがたまつた時、カードを並べて、さらに補ったり、捨てたりする。教材研究のカードがこの場合、そのまま用いられることはいうまでもない。発表の資料ができ、原稿ができた時、カードの役割は終わるわけであるが、原稿なしで、カードにより発表することもある。

発表がすんだ時、もしくは原稿が活字になった時、教材研究のカードはもとの袋へ返すが、報告や研究の過程で作成されたカードは、取捨選択して解体している。その報告や研究に属する袋に入るものもあれば、ゴミ箱へ行くものもある。

B カード法を学習活動へとり入れる

カード法の便利さを国語の学習活動の中で生かしてみたい思いは、

カードによる教材研究をはじめてからずっとあった。しかし、どう
いう学習の場で積極的に生かすかについてはなかなか適切な活動を
設定できず今日まで至っているのが実情である。その中で思いつ
きに過ぎないものではあるが、三つばかりあげてみる。

最初にカードによって学習活動をしたのは、五六年度（昭和31年
度）、尾道東高時代の国語乙（当時甲が必修、乙は漢文と並列されて
ともに選択）の一年で「徒然草」を学習した時、学習した各段の助
動詞をカードにとり、あと整理することをやらせた。この方法は助
動詞の活用と頻度とをみるには有効であった。

七四年度（昭和49年度）、三原高時代の最後の年に、広島県教育
センターの作文の実践研究の協力として、「愛と友情」についての
作文を書かせる過程で、カードを使ってメモをとり、構成指導をし
ている。構成指導においても、カードの使用は有効であった。

もう一つ、七九年度（昭和54年度）、現在校の誠之館高で、現代国
語の一年、単元「論説文を読む」を学習した。これはグループ研究
を中心とした学習であり、十一のグループに与えた課題のほとんど
がカード方式によって研究を進めるものであった。たとえば、「岩
波文庫ジュニア60選の解説はどういう要素があるか」という課題が
ある。この課題解決のためには、解説の文章を全て要素ごとにカー
ドにとり、それを分類整理しなければいけない。二五〇枚ぐらいの
カードをとって分類整理していた。この二五〇枚ぐらいのカードを
担当のグループが発表して、他の生徒に見せた時、「ホウーツ」と
ため息がもれた。基礎作業の大変なことに対する嘆声であろう。

今後カードをいかに有効に学習活動の場に持ち込むかが、わたし

の課題の一つとなろう。

一九四八年十二月に野地先生によってカードの目を開かれてから
三十年以上経過した。わたしの場合は研究の場でなくて国語教育の
実践の場でカード生活が展開した。このことはわたし自身も思いが
けないことであったし、見通しもほとんどないまま自己流にしかや
りようがなかったことである。三十年の国語教師をしたわたしの生
きた証として三百のカードの袋があり、二万枚になろうとするカ
ードがあることは恐ろしくさえある。黒ずみ、変色したカードの一
枚一枚にも消しようがないわたしの実践の記録があり、その実践を
受けて今日のわたしの実践が存在していることを感じるからだ。い
まさら引き返すことのできない道を歩いていること痛感する。

（広島県立福山誠之館高等学校教諭）

— 80 · 1 · 29 —